

Title	臺灣の先史時代遺跡の概要
Sub Title	
Author	宮本, 延人(Miyamoto, Nobuto)
Publisher	三田史学会
Publication year	1931
Jtitle	史学 Vol.10, No.4 (1931. 12) ,p.135(689)- 140(694)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19311200-0135

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

臺灣の先史時代遺跡の概要

一

臺灣の先史時代遺跡については、知られて居る所頗る少い。嘗て、森丑之助氏、鳥居龍藏氏、宮原敦氏等によつて報告せられて居る所もあるが、尙公にせられざる多くの遺跡地を存して居るのである。從來この地にはこの方面に關係せられる方々の少かつたため、出土品の如きも心ない土着の人々の手に移されたもの多く、その一部が總督府博物館に保存されて居るに過ぎなかつた。幸に臺北帝大が設置され、蕃族の調査の一方この方面の資料も蒐集し得るの機を得たため、稍概括的な研究にも便宜を得たのである。當記事は主として臺北帝大土俗人種學研究室の調査及蒐集標本によつたもので、概括的記述を目的としたため、詳細なる比較考證等はこれを略した。

臺灣の生史時代遺跡の概要(宮本)

二

臺灣に於て先史時代遺物の發見される地域は極めて廣い。殆ど全島と云つてもよく、北は臺北附近から南は恒春方面、西は紅頭嶼から東は澎湖島に至るまでその分布を見るのであるが、貝塚は未だ臺北市の一部である圓山にあるのみで、現在では何處にも發見されてない。所々に貝塚のある話を聞くのであるが實際に調査に當ると全部貝を含まない土器包含層で、貝塚と稱せられるものは現在では圓山一ヶ所である。

圓山は臺北市の北隅基隆河に臨んだ海拔三十五米の丘陵地で地平上二十五米の丘陵をなし、貝層は丘の南面の傾斜地に多く、最もよく原態を存して居るものは現臨濟寺の裏に當る一帶の斜面で表面上五十糎内外の下部に一米或は五十糎位の貝層を

(六九)

存して居る。圓山貝塚については別に稿を更めて詳細に報告するつもりであるが、その概略を述べれば、出土品は石器、土器、骨器、人骨の一少部で、石器は第一圖版に示した如きもので石質はスレート製のもの多く、片

緣部、把手には特殊の手法が見られて居る。骨器は主に鈔に類する様なもので、発見されたものは比較的少いやうである。貝の種類は淺利の類多く、殆ど全部この種のもので、卷貝の類は非常に僅少である。貝層中から

岩質のものが之に次ぎ、砂岩のものも少くなかつた。石器中第一圖版の3の形の鑿形で中部のくびれた跡を有するものは本圓山特有と云つて宜く、本島に於て他には発見されなかつた。土器は無紋のものも多く、縄文、網目の



第一圖 高雄州墾丁寮出土打製石斧

ものも発見されたが極く少量であつた。土器については後章にも述べるが完全なる出土品全くなく全形を知るに由ないが、縁、把手等の破片によつてこれを窺ふに内地縄文土器の如き變化はないが、

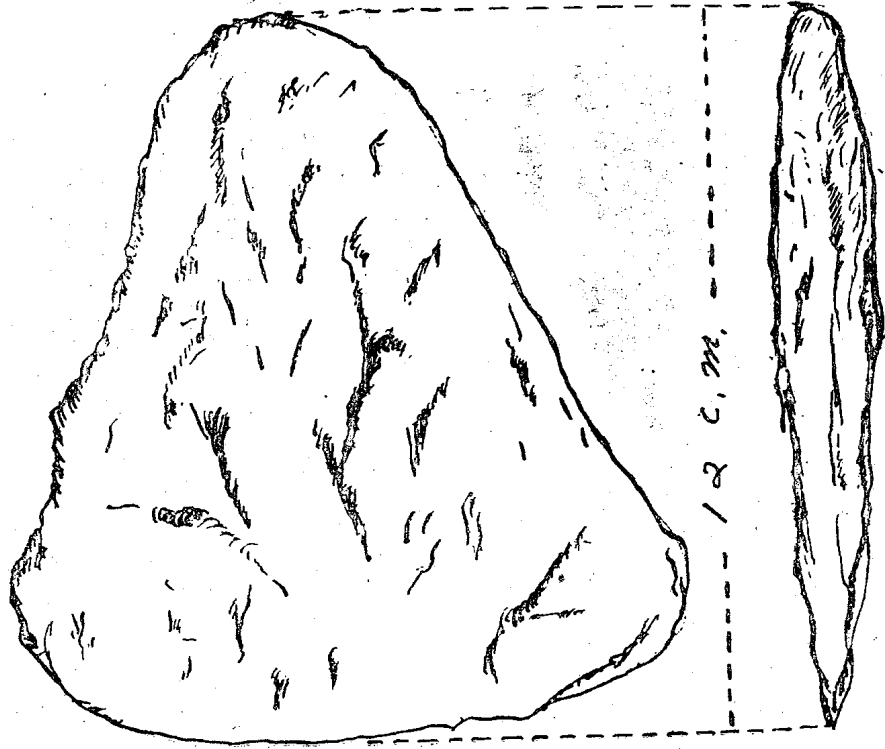
三の圓山特有と認められるものがあるが、總じて之を見るに、他所発見の石器土器と大なる共通點のある事は否めないのである。同貝塚に於て人骨は未だ完全なものを見ないのであるが、昭和四年

は獸骨が夥しく発見されるが完全な形を整へたものは発見されなかつた。貝塚の附近一帶大直方面にかけて石器土器の散布多く表面採集によつて瑪瑙の管玉も発見された。要するに臺灣唯一の貝塚である圓山には中には二

臺北大學に於て發掘せる節下顎の一部を得た。

三

臺灣の石器は之を大別すると精巧なる磨製石器の類と、極く粗雑な主として砂岩質の打製石斧の類とに分けられ、分布も相交錯して居る所もあるが、打製石器のみ出土する地方がある。然し磨製石器を出す地方は殆ど全部打製石器を見るやうである。臺灣の打製石斧には内地の石鏃石斧等に見る様な精巧なるものは見當らない。打製石器は極めて粗雑で、その形も變化に乏しく、その形は二三通に限られて居るのである。石質も砂岩で、火山岩質のものは稀の様である。即ち臺灣には黒耀石、フリント等の硬質の石材乏しく



第二圖 紅頭嶼打製石器

従つて石器の材料としては砂岩、スレート、片岩の硬度の低い石材を用ひる結果、打製としては粗

雑なるもののみしか製し得ず、尖鋭なる用具は磨製として加工し易いスレート、片岩等によつたものと考へられるのである。かくの如き打製石器の分布して居る地方は、臺北附近平野、新竹州大湖郡下、汶水、二本松方面、臺中州新高郡蕃地イバホ附近、臺南州烏山頭附近、高雄州恒春郡下龜山、懇丁寮附近、臺東廳臺東附近及卑南社附近、東海岸海岸山脈の東側一帯の地方等で、特にこの種の石器の多いのは東海岸花連港、臺東兩廳の海岸に面せる海岸アミ族の住地地方で、猫公、新社、

大港口、加走等は累々として石器の散布して居るのを見る事が出来る。又新竹州大湖郡、臺中州イバホ社附近のものも非常なる量に上つて居るのである。紅頭嶼に於ては散布して居るものの外に蕃人が所持して居るものがある。その打製石斧の形式は本島のそれとは少しく異つて居て、幾分扇形に先方が開いて居る(第二圖)。紅頭嶼蕃人は石器を籐で結へて天井に釣つて保存して居る。彼等の中にはなほ件の石器の製法を記憶して居るものもあつた。嘗て臺北帝大で調査の節、その一人をして試みに製作せしめて見たのに、海岸の丸石を左手に持ち、臺石の上に載せ、右手に石を持つてその端を打つてこれを縦に割り、順次に肩を落して行くのである。

磨製石器は打製石器に比してその分布が幾分狭められる様であるが、大體に於て全島に亘ると云つて宜しく、特にその形鑿の刃に似たる片刃の形式(第一圖版の1)のものは最も廣く分布し、北は臺北附近、南は高雄州墾丁寮、東は澎湖島、西は紅頭嶼に至るまで磨製石器出土の地には必ずこの

形式を見るやうである。更に又分布を立體的にこれを見ると、低きは海拔十米を出でざる臺北附近から高きは新竹州大湖郡蕃地二本松附近の海拔五千尺、同所より數里北の雪見附近の海拔六千尺に及んで居る。山岳地方の磨製石器は概して少い様であるが、尙新竹州竹東郡の奥にはこれを見る様である。

右の鑿形石器は小なるは長邊二糎より大なるは十糎にも及ぶものあり、石質はスレート質のもの最も多く、安山岩、片岩のものこれに次いで居る。花蓮港花岡山附近には片岩の美麗なる形をしたものが多い。臺北圓山貝塚附近出土の石器中には縦に溝を穿つた形のものも發見された(第一圖版の2)。恐くはこれに柄を附する時の便利に掘られたものと思はれるのである。圓山貝塚出土のものには更に中央部に縊れのあるものも多い事は前にも述べた。

紅頭嶼蕃人も安山岩質のかくの如き片刃の鑿形の石器を所藏して居た。その形本島のそれと殆ど同じものがあるが、頗る長大で長二十糎、幅六糎

位の形のものを駐在所の田中長兵衛氏が入手し、臺北帝大に保管して居るものもある。

布錢の如き形をした石斧も臺灣に多くの散布を見る(第一圖版⁴)。石質は多く砂岩で、磨製であるが、前記片刃の鑿形のそれに比すれば、その數も少く、分布も限られるかとも思ふ。圓山附近に最も多く概して西海岸に多い様である。この種のもので異例なるものは高雄州恒春郡龜山及墾丁より出土の石器で、その刃の部分が一方に曲つて鎌に似た形を窺はれるのである。

貝塚等から發見される第一圖版⁵の形に類するものは各地に發見される。新竹州二本松にもこれに似た出土品あり、花蓮港方面、臺東卑南社附近にもこれに類似したものが發見される。質は主にスレートで、半月形ならずして中には直刀のものも多い。

臺灣の石器の中、内地其他にその類例少く、又最も精巧なるものの一に第二圖版の如きものがある。1、2、4は臺北市外景尾より發掘されたものであるが、質は安山岩、表面は鏡の如く滑に磨か

れ、長さ約二十糎、片面の脊は稜をなし、根元は柄を付けたと考へられる如く粗雜となつて居る。

類似のものは臺中州下、臺南州下にも時折發見せられ、その大なるものは長さ五十糎にも及ぶと稱せられて居る。主に發見せられるは西海岸で、東海岸にはまだ見ない様である。

楕圓形の天然石の兩端を毀した分銅形にして錘石に似た形のもの、主に砂岩であるが、花蓮港花岡山に最も多く、高雄州恒春郡下にも相當あり、臺北圓山貝塚、臺中州水底寮より出土するものにはスレートを以て楕圓形扁平に磨き、兩端に筋を入れて分銅石としたものもある。(第三圖版)

花蓮港花岡山からはスレートの厚さ一糎位、直徑十糎位の圓盤の中央に穴を穿つた刀の鏢の如きものが出土した。花岡山發見のものは打製で粗雜であるが、新竹州の雪見附近、海拔六千尺の高所より出土したもの(第三圖版³)には同じくスレート製であるが磨製で直徑約二糎位の小形のものであり、同種のものには高雄州恒春郡墾丁寮より出土した。要するにこの種のものには全島から出土するも

のと考へられるのである。今試みに臺灣蕃人の土俗を見るに、紅頭嶼蕃人ヤミ族は直徑約五糎、厚五十糎位の粘土製圓盤の中に孔を穿ちその形略前記諸地方に發見される圓盤に類似したものを紡績車に使用し、アミ族、花連港大巴壠社蕃人も同様の目的に類似の品を使用して居るのを見る事が出来る。

東海岸地方に於ては屢々頗る尨大なる圓盤を見出す事がある。恰もヤップ島の貝貨を想起する如きものであるが、石質は主に砂岩、その分布は花連港にあつては平林附近、大巴壠社附近で、臺東廳では加走灣頭である。平林附近のものは直徑八十糎にも及び、眞中の孔の直徑十五糎位、石の厚さ十糎位、この孔に嵌める石柱の如きものも共にあり、出土の節は中にはこの柱の上に水平に載せられてあつたものもあると云ふ。平林驛の西方約

十町の丘陵上開墾の節發見せられ、附近から片岩質の石器が許多發見された。大巴壠社のものも略同様であるが、その厚さ幾分厚く、直徑に於て稍小であつた。柱に似たものも發見せられたが、その圓盤との關係は不明である。一蕃人は彼等の占に用ひたもの（竹を極く細く割り、件の石に兩手にて擦つて切れた竹の切目を見て占ふ彼等の占）と稱して居る。臺東廳加走灣頭には家の軒下にこの圓石を立て掛けて暴風に備へる屋根の重石に用ひて居る（第四圖版）。加走灣頭には其他多くの奇妙なる石製品を發見し、先端を圓狀にしたる高さ一米位の四角柱、反對に長さ一米ばかりの稍扁平の天然楕圓形の石の一方の角に四角の凹味を付けたるもの其他無數の打製石斧散亂し、今より約五十年前、彼等が移住開墾の折之等を掘出したものと傳へて居る。